

指導力向上に関する研究

I 研究主題

子どもが話し合う、子どもが動き出す、とっておきの学級活動Ⅱ —クラスづくりは学級会から—

Ⅱ 主題設定の理由

1 社会的背景から

現在、私たちを取り巻く状況は、情報化、グローバル化など、急速に変化しており、予測困難な時代となっている。世界は「Society5.0 時代」の到来を迎え、AI や IoT を基礎とした産業革命に匹敵する変革が起きている。そうしためざましい技術革新により、人々の価値観や生活様式は多様化し、人間関係もまた複雑化している。特に子どもたちを取り巻く環境においては、SNS(=Social Networking Service)の急速な普及に伴い、様々な問題が発生している。SNS は、情報発信や情報収集ができたり、遠くにいる友人とも交友関係を結べたりできるなど、多くのメリットがある。しかしその反面、相手の表情が見えないため、お互いの気持ちが伝わりにくく、強い信頼関係を結ぶことが難しい。そのような時代を生きる子どもたちには、お互いの個性や考え方を認め合ったり、支え合ったりすることにより、安心して過ごせる人間関係を構築していく力をつけることが必要である。また、自己の生き方に向き合い、社会や集団の変化に対応しながら主体的に自己の判断、責任において自らの行動を決定していく力、自己指導能力を育成していくことが大切である。学級活動はそのような力を育成する活動の中核である。学級の身近な問題をみんなで共有し、考え、話し合い、合意形成をしていく、さらに合意形成したことをみんなで実践して振り返って次の実践に生かすなどの活動の積み重ねをすることで、自治的能力が育成され、よりよい学級づくりにつながっていく。学級活動をこれまで以上に活性化し、充実させることは、子どもが主体的に活動する力の育成を図り、学級に安心して自分の思いを言える土壌を醸成すると考える。そうした取組が、近年増加傾向にある不登校やいじめの未然防止にもつながっていくのではないかと考える。

2 本市の現状から

昨年度本研究所が行った「教育に関する調査研究」では、子どもが自ら課題を見つけ、話し合い、実践する力を育成するために、議題の選定から振り返りに至るまでの流れや、教師の準備・指導を含めた学級活動のシステム化を進めた。研究の成果物として、「話し合い活動リーフレット」を作成し、市内小学校へ配布した。研究協力員の実践から、学級活動を充実させることは、子どもに主体性を育み、学級に支持的風土を醸成し、支え合い、高め合う学級づくりにつながるということがわかった。また、活動過程に沿った教師の適切な指導や助言が大切であることもわかった。昨年度の実践の中でも、教師の適切な指導や助言によって話し合いがまとまったり、子どもの意欲が高められたり、意識の変容がみられたりした。学級活動は、子どもの主体的な活動であるが、子どもは、どういった活動がよりよいものなのか、自分の行動や発言がなぜよかったのかということに自分では気づきにくいので、子どもの行動や発言を教師が意味づける・価値づけることは、学級活動を充実させるために欠かせないのである。

しかし本市では、小学校の学級担任のおよ半数が、教職経験年数5年目までの若手教員で占められており、学級活動の優れた指導のコツなどを若手教員が享受する機会が少なくなっている。本

市では、小学校で話し合う力を育てる学級活動の実践を進めることが、取組の重点となっており、「特別活動」教育推進員による指導が継続して行われている。そのため、学級活動の意義やよりよい指導については少しずつ広がってきているが、まだ学校や学年での積み上げが十分ではない。そこで今年度は、教師の適切な指導や助言を行うことで、子どもが自ら課題を見つけ、他者と協働しながら主体的に課題解決に向かい、自主的、実践的に取り組む態度の育成を図り、学級活動を充実させていきたいと考える。研究を通して、よりよい学級活動のあり方を市内にさらに広く定着させたい。

Ⅲ 研究の目標

学級活動において、子どもが自ら課題を見つけ、他者と協働しながら課題解決に向かって、自主的、実践的に取り組む態度の育成を図る。また、「話し合い活動リーフレット」を活用した、よりよい学級づくりを市内に広く定着させる。

Ⅳ 研究の仮説

学級活動において、「教師の7つの手立て」を行えば、子どもが自ら課題を見つけ、他者と協働しながら課題解決に向かって、自主的、実践的に取り組む態度の育成が図られるであろう。

Ⅴ 研究についての基本的な考え方

Ⅰ 特別活動において育成をめざす資質・能力

小学校の学習指導要領には、特別活動の目標について、これまで重視してきた「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点に基づき、以下のとおり明記されている。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

特別活動は、児童生徒による自発的、自治的な活動を通して、学級や学校におけるよりよい生活や人間関係をつくるとともに、お互いを尊重し、認め合う支持的な風土を築いてきた。支持的風土のある学級においては、子どもたち一人ひとりに居場所があり、安心して思いが出せる場が保障されている。児童生徒が「友達の話じっくり聞きたい」「自分の考えを最後まで聞いてもらえる」と感じることができ、温かい人間関係が形成されているため、自尊感情も高まってくる。このように自分や他者を大切にする気持ちを育てることは、いじめの防止や抑止力にもつながるのではないかと考えられる。さらに、児童生徒がよりよい自分や学級・学校生活、人間関係を築く活動を通して、複雑で変化の激しい社会を「生きる力」を獲得していくという意味でも、特別活動の役割は大変大きなものであると考える。

2 学級活動の内容について

学級活動は、学校生活において最も身近な所属集団である「学級」を基盤にした活動であり、特別活動の中心となる活動である。

学級活動では、学級や学校の生活をよりよくするための課題を見つけ、解決するために話し合い、協力して実践する。

学級活動には、三つの内容があり、学習指導要領では、以下のように示されている。本研究では、学級活動(1)の話合い活動に視点をおき、取組を進めていく。

(1) 学級や学校における生活づくりへの参画

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

学級や学校における生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること。

イ 学級内の組織づくりや役割の自覚

学級生活の充実や向上のため、児童が主体的に組織をつくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。

ウ 学校における多様な集団の生活の向上

児童会など学級の枠を超えた多様な集団における活動や学校行事を通して学校生活の向上を図るため、学級としての提案や取組を話し合って決めること。

(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

ア 基本的な生活習慣の形成

身の回りの整理や挨拶などの基本的な生活習慣を身に付け、節度ある生活にすること。

イ よりよい人間関係の形成

学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること。

ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

現在および生涯にわたって心身の健康を保持増進することや、事件や事故、災害等から身を守り安全に行動すること。

エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

給食の時間を中心としながら、健康によい食事のとり方など、望ましい食習慣の形成を図るとともに、食事を通して人間関係をよりよくすること。

(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現

ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成

学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常の生活をよりよくしようとすること。

イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解

清掃などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し、社会の一員として役割を果たすために必要となることについて主体的に考えて行動すること。

ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用

学ぶことの意義や現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えたり、自主的に学習する場としての学校図書館等を活用したりしながら、学習の見通しを立て、振り返ること。

学級活動は、各活動の特質に即し、教師の適切な指導の下、自主的、実践的な活動を積み重ねることで、児童の自治的能力や自己指導能力、自己実現の力を高めていく。とくに学級活動（1）においては、児童が自分たちの学級や学校の生活をよりよくするために、問題を発見し、課題を見だし、話し合い、合意形成したことを協働して取り組むとともに、一連の活動を振り返り、次の課題解決へつなげることを通して自治的能力を育てていく。学級活動を充実させるためには、学級活動（1）がポイントとなる。

3 本研究における授業づくり

（1） 目指す児童の姿

本研究の目標の「児童が自ら課題を見つけ、他者と協働しながら主体的に課題解決に向かい、自主的、実践的に取り組む態度」をふまえ、目指す児童の姿を次のように設定する。

- 学級や学校での生活をよりよくするための課題を自ら見つけることができる。
- 話し合い活動に進んで取り組み、合意形成を図ることができる。
- 友だちと協力し合って実践し、自分の行動や学級の取組を振り返ることで、よりよい学級をつくろうとすることができる。
- 活動する中で、自分のよさや友だちのよさに気づくことができる。

（2） 教師の適切な指導・助言

授業実践を行うにあたって、目指す児童の姿をふまえ、教師の視点とそのための手立てを次のように整理した。なお、それぞれの手立ては、「話し合い活動リーフレット」の内容に対応している。

視点1 自ら課題を見つける

<手立て①> ※リーフレット（事前の活動 ①問題の発見）参照

- ・児童の思いやつぶやきを拾い上げ、議題カードに書くように助言する。
- ・問題を発見する視点を伝える。
- ・議題箱や提案カードなどを設置する。
→児童が自分たちの生活から問題を見つけやすくなり、議題としてすぐに提案できる。

<手立て②> ※リーフレット（事前の活動 ②議題の選定）参照

- ・「学校生活の中から見つけた問題」、「より緊急性のある問題」、「児童が本気で取り組む問題」などの視点をもち、今の学級に必要な議題を選定させる。
→児童が、より切実感・必要感のある議題を選定でき、話し合いの本気度が高まる。

視点2 話し合い活動に進んで取り組む

<手立て③> ※リーフレット（事前の活動 ③活動計画の作成）参照

- ・話し合いの目的に沿った具体的な提案理由を設定させる。わかりやすい文章表現にし、語尾は「～から」にする。
→提案理由は、合意形成を図る際の根拠になるため重要で、教師が積極的に助言して、具体的な内容にすることが大切である。児童が提案理由を意識することで合意形成に向かって話し合いを進められる。

<手立て④> ※リーフレット（事前の活動 ④問題の意識化）参照

- ・背面黒板等を活用し、学級会の予告をする。

- ・自分の考えを学級会ノートに記入させる。
→児童の問題意識や自分たちの力で課題解決していくのだという意欲が高まる。

<手立て⑤> ※リーフレット（当日の活動）参照

- ・学級会の前に、前回の学級会や実践活動でよかったこと、今回意識すべきことを確認し、学級会の後に、「誰の、どの発言が、どのようによかったか」を、「話し合いの評価8ポイント」（話し合い活動リーフレット参照）を活用しながら具体的に評価する。また、司会グループへの称賛や学級全体へ実践意欲を高める声かけをする。
- ・話し合いの状況を適切に把握し、機会をとらえて下表に示した助言をし、司会に進め方のアドバイスをしたり、学級全体に話し合う方向性を示したりする。
→適切な回数とタイミングを意識し、具体的な内容を助言することによって、児童が主体的に話し合ったり、よりよい合意形成につながったり、児童の意欲が高まったりする。

【話し合いがそれたとき】	「提案理由やキーワードをもう一度確かめてみましょう。」
【折り合いが見られないとき】	「それぞれの案の良さはどんなところかな。」「（反対理由になっている）心配な点の解決策を出し合ってみましょう。」
【発言が偏ったとき】	「〇〇という案についてはどう思いますか。」「この案については、意見が出ていないので、今回は見送ってもいいですか。」
【反対意見ばかりが出るとき】	「よりよくするためにはどうすればいいか考えましょう。」
【司会が困っているとき】	司会に進行の方向性を助言したり、必要であれば学級全体に助言したりする。
【話し合いの評価8ポイントに関わる発言がでたとき】	児童の発言がどのようによかったかを全体の場で共有する。

●すぐに指導助言を行う場面

次のようなことが話し合いででた場合は、その場で適切に指導助言を行うことが必要である。

- ・学級の児童を傷つけることが予想される問題、個人情報やプライバシーの問題など人権に関わること。
- ・実施の時間など教育課程の変更や校内の決まり、施設・設備の利用の変更、金銭の徴収に関する問題。
- ・健康や安全を損なうおそれがある問題。

視点3 児童自身がよりよい学級をつくろうと継続して取り組む

<手立て⑥> ※リーフレット（事後の活動 ②振り返り）参照

- ・実践後に振り返りをさせ、新たにでてきた課題を共有し、以降につなげる。
- ・学級会の歩みを掲示する。（よかったことを記録する）
→児童の実践意欲が高まる。

視点4 自分や友だちのよさに気づく

<手立て⑦> ※リーフレット（当日の活動、事後の活動 ②振り返り）参照

- ・話し合いでの友だちの発言や司会グループの進行など、よかったところを書かせたり、発表させたりする。
- ・実践後に振り返りをさせ、互いのよさやがんばりを認め合えるようにする。
→自分や友だちのよいところに気づくことができる。

VI 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 市内小学校から推薦された教員、指導講師、教育研究所所員で研究協力員会を組織する。
- (2) 研究協力員は、学級活動の実践を各校で実施する。
- (3) 研究協力員の実践や聞き取り調査・アンケート調査から、児童と指導者の変容を分析し、成果と課題をまとめる。

2 研究の経過

時期	内 容	
4月～5月	研究構想の策定	・研究主題の決定と研究計画の立案 ・指導講師、研究協力員の依頼と委嘱
6月～12月	授業実践調査 聞き取り調査	・学級活動の実践調査 ・研究協力員への聞き取り調査
7月4日	第1回研究協力員会	・研究概要や進め方の説明
7月	第1回アンケート	・A：市内小学校通常学級担任を対象に調査（夏休み） ・B：研究協力員と学級の児童を対象に調査 ・アンケートの実施と分析
12月	第2回アンケート	・A：市内小学校通常学級担任を対象に調査（冬休み） ・B：研究協力員と学級の児童を対象に調査 ・アンケートの実施と分析
1月 1月25日	研究のまとめ 第2回研究協力員会	・研究紀要の作成 ・研究のまとめについて
2月14日	研究発表大会	・研究の成果と課題について
3月	本年度のまとめ	・研究紀要の完成

VII 研究の内容とその成果

1 児童が自ら課題を見つけ、自主的、実践的に取り組む態度を育成する学級活動の実践

(1) 研究協力校Aの実践（第6学年 7月 議題「一学期おつかれさま会をしよう」）

＜ポイントとなった教師の手立て＞

③話合いの目的に沿った具体的な提案理由を設定させる。

⑤話合いの状況を把握し、適切な助言をする。

学級会の後に、具体的な話や評価をする。

⑥実践後に振り返りをさせ、新たにでてきた課題を共有し、以降につなげる。


まず提案理由をわかりやすく設定させていた。（図1）提案理由は、合意形成を図る際の根拠となるので重要で、話し合う目的がはっきりわかるように具体的な表現にすることが大切である。提案理由は、「今こうなっているので、こうすることで、こうしたい、こうなりたい」というようにするとわかりやすい。このようにしたこと、考えやすくなり、実際に児童たちは、話合い活動に進んで取り組み、「協力できると思うので〇〇と

1学期が終わろうとしています。4月から、いろいろな授業や行事を通して仲を深めてきました。しかし、仲良くできている人と、まだそうではない人がいるので、みんな協力して、1学期最後のイベントを通して仲良くなり、さらによいクラスにしていきたいと思ったから。

図1 提案理由

いう意見に賛成です。」など、提案理由に沿った意見を多く出していた。

また、話し合いの状況を把握し、教師が意見のしぼり方やまとめ方を助言していた。教師の適切な助言によって、児童が案をいくつかにしぼったり、よりよい対策案を見出したりしてまとめていく姿が見られた。(図2) さらに効果的だったのは、教師の助言を司会グループだけでなく、学級全体に向けてしていたことである。学級全体に伝えた方が、話し合いの進め方やまとめ方をみんなで学んでいける。そのようにしたことによってこの学級では、この後、誰が司会になっても、児童の力でうまくまとめていけるようになった。



教師の適切な助言によって、案が13から6にしぼられた。

教師：反対意見しか出ていない案や何も意見が出ていない案もあるから、しぼっていこう。
司会：「漢字クイズ」を外していいですか。
教師：どういう基準で外しているかを説明しよう。
司会：反対意見しかないものを外します。
（反対意見しかない案4つが外される）
次に、何も意見が出ていないものを外します。
「共通点さがしゲームを外していいですか。」
（何も意見が出ていない案3つが外される）

図2 教師の助言を司会グループと学級全体にする場面

「まとめる」の段階では、以前の実践の課題をふまえて児童が、「前回のイベントで時間が足りなかったから遊びの数は3つがいい」と発言する場面があった。これは、以前の実践の振り返りで、次における意見で上がったものであった。実践の振り返りを新たな課題解決に生かして、よりよい学級をつくろうとする、とてもよい児童の姿であった。この発言については、最後の教師の話でも、「〇〇さんの、『前のイベントで時間が足りなかったから遊びの数は3つがいい。』という発言が、前の実践の振り返りを生かさせていたのでとてもよかった。」としっかり評価されていた。教師の最後の話では、「誰の、どの発言が、どのようによかったか」を具体的に評価することが大切である。このように、具体的に評価したことによって、自分や友だちのよさ、がんばっているところに気づくことができ、次の話し合いに自信をもって取り組めるようになり、効果的であった。

(2) 研究協力校Bの実践(第6学年 11月 議題「時間やルールを守る取組を考えよう」)

<ポイントとなった教師の手立て>

- ②「児童が本気で取り組む問題」などの視点を持ち、今の学級に必要な議題を選定させる。
- ③話し合いの目的に沿った具体的な提案理由を設定させる。
- ⑤学級会の前に、具体的な話をする。
話し合いの状況を把握し、適切な助言をする。

この学級では、2学期の半ばに学級目標の振り返りを行ったところ、「時間やルールを守ること」が以前よりできていないと、多くの児童が考えていることがわかった。そのことをふまえてこの議題で話し合うことになった。つまりこの議題は、児童にとってタイムリーで、より切実感・必要感のある議題だということである。このような議題を選定させることにより、話し合いの本気度が高まる。さらにこの学級では、話し合いの最初に、学級目標の振り返りを発表し、なぜこのことを話し合う必要があるのかを、全員で共有している。そのよう

にすることで、提案理由が一人ひとりに明確に伝わり、話し合いへの意欲が高まる。実際の話合いでも、問題を自分事としてとらえ、解決方法を積極的に提案する児童の姿が見られた。

最初の教師の話では、前回の学級会でよかったことや今回の目標となることが、具体的に児童に伝えられた。(図3)また、よりよい合意形成につなげていくためのポイントとなる発言、「話し合いの評価8ポイント」(図4)を、教師の最初の話でおさえたり、教室に掲示したりしていた。そのような教師の適切な指導や助言によって、児童は、どのようなことを意識して発言すればよいのかや意見のまとめ方がわかり、話し合いの仕方を学んでいくことができる。

この話し合いでは、「ベル着」や「名札をつける」など、多くの取組を行うことが決まったが、この学級では、その後もベル着を意識して継続していた。意欲的に実践し、よりよい学級をつくろうとするとともによい児童の姿が見られた。児童にとって切実感・必要感のある議題を選定させたことが、よりよい実践につながったのだと感じた。

前は今までで一番点数が高かった。司会に進め方のアドバイスをしている人がいてとてもよかった。今回はみんながそういう発言ができたらいと思う。

図3 教師の最初の話

- ①提案理由に触れる発言
- ②〇〇さんの立場やみんなの立場になって考えた発言
- ③ゆずりあったり、折り合ったりする発言
- ④新しい方向性を出す発言
- ⑤友だちの考えを聞いて自分の考えが変わった発言
- ⑥困ったことや現実問題に触れる発言、本音の発言
- ⑦話し合いをまとめようとする発言
- ⑧話が論点からずれた時に元に戻そうとする発言

図4 話し合いの評価8ポイント

(3) 研究協力校Cの実践(第5学年 11月 議題「つづけよう!きれいきれいしよ!作戦の計画を立てよう」)

<ポイントとなった教師の手立て>

- ①問題を発見する視点を伝える。
- ②「学校生活の中から見つけた問題」などの視点を持ち、今の学級に必要な議題を選定させる。
- ⑤話し合いの状況を把握し、適切な助言をする。
- ⑦実践後に振り返りをさせ、互いのよさやがんばりを、認め合えるようにする。

この話し合いのきっかけとなったのは、教師の「問題を発見する視点を伝える」ある一言だった。この学級では、2学期の初めに、学級目標の4つの柱に沿って1学期の振り返りを行った。4つの柱のうち、「助け合いお手本になる行動ができたか」の達成度が特に低かった。児童たちがどのように解決したらいいか悩んでいる中、教師が「何か1つのことで学校のお手本になってみるのはどうか。」という助言をした。教師の助言をきっかけに、児童たちは、「学校の中をまわって問題を見つけ、自分たちがその解決方法を提案してみよう。」と考えた。校内をまわって調査した結果、「落とし物が多いことと、廊下の荷物が落ちてい」という問題を見つけた。(図5)そして、学級にも同じような問題があることから、学校のお手本になるためにまずは、学級で実践してみようということになり、次の学級会で話し合うことになった。教師が「学校生活の中から見つけた問題」という視点で助言をしたことで、児童が、今の学級や学校の問題に気づき、解決しようとする姿が見られた。このように、事前の活動において教師が、積極的に児童に助言することは、大変効果的である。



図5 校内を調査する様子

9月の学級会で、「整理・整頓が完ぺきになるための方法を考えよう」という議題で話し合い、学級で実践を継続した。(図6)その後、実践の振り返りを行い、次の実践へとつなげていった。そして11月には、いよいよ学校に提案する方法を話し合うことになった。

この話し合いでは、多くの意見が出たため、話し合いが複雑化し、話し合いの目的からそれていく場面があった。そんな状況を受けて教師は、提案理由やキーワードを再確認するように助言をした。その結果、提案理由やキーワードに沿って意見が整理されていき、またたくまに合意形成につながっていった。

その後の実践では、各学級に配るポスターやすごろくの制作、学校の落とし物コーナーの整理(図7)、学校に提案するアピール動画の制作などが、児童同士で協力して行われた。このように、教師の最初の助言がきっかけで、友だちと協力し合って実践し、よりよい学級や学校をつくらうとする児童の姿が見られた。



図6 整理整頓されている教室の棚



図7 学校の落とし物コーナーを整理する様子

2 児童や指導者の変容

(1) アンケート調査から見た児童の意識の変容

研究協力校3校の児童を対象に、「目指す児童の姿」をふまえ、7月(始期)と12月(終期)にアンケート調査を実施した。

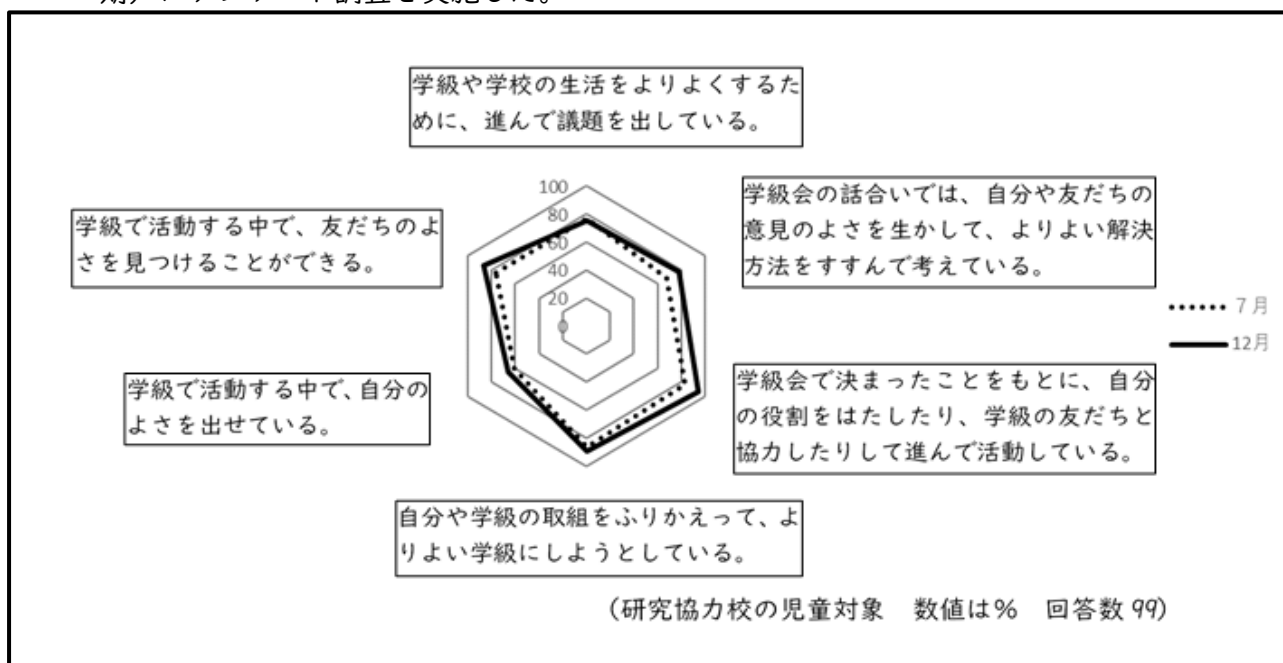


図8 児童アンケート調査の比較

ほぼすべての調査項目において、「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的に回答した児童の割合が上昇した。このことから、学級活動において、教師が適切な指導や助言を行ったことで、児童が自ら課題を見つけ、他者と協働しながら課題解決に向かって、自主的、実践的に取り組む態度を育成することにつながったといえる。

(2) 聞き取り調査から見た児童の変容

研究協力員は、学級の成長を次のように振り返っており、ここからも児童の変容を見ることができた。

<研究協力校の学級の成長>

- 初めは話を聴けないクラスだったが、友だちの意見をさえぎったりせずに最後まで聴けるようになった。
- 折り合いをつける経験をしたことで、周りの意見を聴いて納得できるようになり、日常生活でもめることが減った。
- 学級のことを自分たちで考えて決めるよさを実感できた。
- 自分たちで決めたことなので、前向きに活動できるようになった。

また、児童の中に大きな成長がみられる子どももいた。

児童Aは自分の思いをみんなの前で言うことが苦手だったが、学級会を通して、みんなの前で意見を言えるようになり、話合いに前向きに取り組めるようになった。児童Aは、第2回の学級会の感想には、「発表ができなかったから次は意見を言えるようにしたい」と書いていたが、第3回で初めて意見を言い、その日の感想には、発表できてうれしい気持ちを書いていた。その後も自分から意見を言えるようになり、さらには、友だちの意見をほめたりするなど、とても前向きに取り組めるようになった。(図9)

児童Bは、こだわりが強く、ときには自分の意見を通そうとするところがみられたが、学級会を通して、周りの意見を聴いて、納得し、折り合いをつけられるようになった。

このように、学級活動において、教師が適切な指導を行ったことで、友だちとの関わり方を学び、よりよい人間関係を構築することにつながったと考えられる。

☆第2回学級会の感想

発表ができなかったから次は意見を言えるようにしたいです。



☆第3回学級会の感想

今日は自分から意見を言えて思っていることを話せました。意見を話せたらスッキリしました。



☆第5回学級会の感想

今日も自分から手を挙げて答えることができました。
○○さんの意見は、考え方がとてもよいと思いました。

図9 児童Aの感想

(3) 研究協力員の意識や指導力の向上

研究協力員にも、7月(始期)と12月(終期)にアンケート調査を実施した。このアンケートでは、「子どもが自ら問題を見つけられるようにするため、『問題を発見する視点』を伝えている」など、学級活動における教師の指導や助言に関する16項目について指導できているかをたずねている。16項目のうち、研究協力員全員が明確に「あてはまる」と回答した項目が7月では6つだったのに対して、12月では8つと半数に達した。また、研究の終期に自身の取組を振り返ってもらったところ、「提案理由を具体的にするのが難しかったが、何とかできるようになった。」、「折り合いをつけるのが難しい子どもが折り合いをつけられるようになった姿を見て、学級会をがんばってきてよかったと思った。」、「6年生の1年間でこれだけ成長できたのなら、1年生から積み重ねたらすごいことになると思う。積み重ねを大切にしていきたい。」、「学級会をやってきてよかった。意見を重ねて自分たちで決めることの大切さが子どもに伝わって、成長を感じられた。これからはがんばって取り組みたい。」などの振り返りが見られ、意識の向上や指導力の向上につながったことがわかる。

3 話し合い活動リーフレットの活用と本市の学級活動の現状

学級活動の大切さを、市内に広く定着させるために、昨年度作成した「話し合い活動リーフレット」（図10）の活用を広げていく取組を行った。研究協力員の先生にも「特別活動通信に掲載する」、「初任者の先生に勧める」、「夏期研修講座で紹介する」など、さまざまな方法で広げてもらった結果、リーフレットを活用している先生の割合は、およそ6割に達した。

また、市内小学校の学級担任を対象に、学級活動の実践についてのアンケート調査を行ったところ、学級活動の実践を「とても積極的に行っている」と回答した教員の割合が約10%上昇した。（図11）



図10 話し合い活動リーフレット

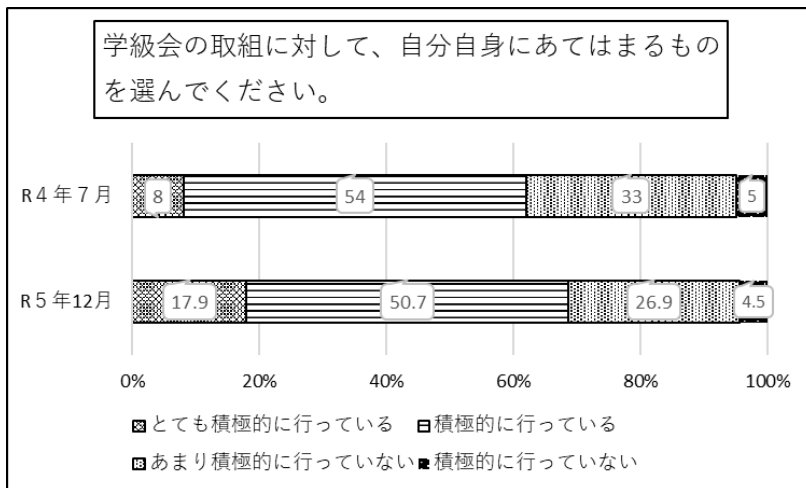


図11 教員アンケートの比較
（市内小学校の学級担任対象
回答数 126）

Ⅷ 研究のまとめと今後の課題

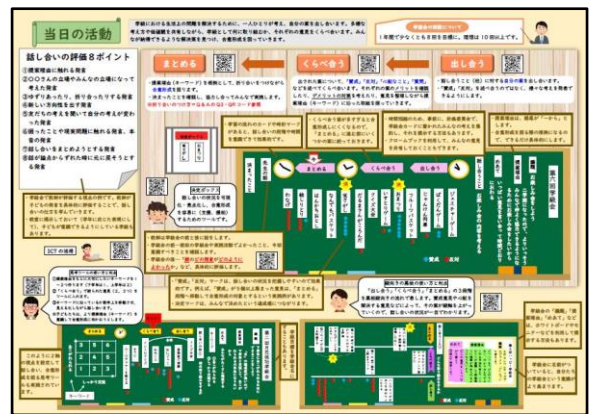
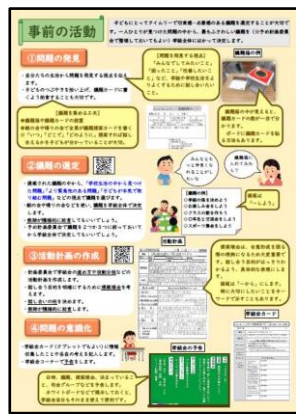
1 研究のまとめ

- （1） 教師の適切な指導や助言を意識した学級活動の実践を、継続的に進めたことで、児童が自ら課題を見つけ、他者と協働しながら課題解決に向かって、自主的、実践的に取り組む態度を育成することにつながった。
- （2） 「話し合い活動リーフレット」を活用した、よりよい学級づくりをさまざまな方法で市内に発信したことによって、学級活動の取組が充実することにつながった。

2 今後の課題

本研究では、児童が自ら課題を見つけ、他者と協働しながら課題解決に向かって、自主的、実践的に取り組む態度の育成をめざして、教師の適切な指導や助言を意識した学級活動の実践を進め、成果を得られた。また、「話し合い活動リーフレット」の活用などを通して、市内によりよい学級活動の実践が定着しつつある。しかし、研究を進めていく中で、学校や学年によって定着の差が見られることに気づいた。今後は、教員同士で授業を参観し、意見交換するなどして、よりよい学級活動の実践を積極的に共有し、広げていくことが大切になってくる。実践の共有をすることで、指導において自分とは違う視点や教師の働きかけに気づくことができ、視野を広げることができる。また、自分自身の実践を改善していくことで、指導力の向上につながり、よりよい学級づくりにつながっていくと考える。さらに、中学校と連携を図り、学級活動の実践を小中と継続していくことで、子どもに人間関係を構築していく力や自己指導能力を着実につけていくことも大切である。

【参考資料 「話し合い活動リーフレット」】



学級活動の実践について、「事前の活動」、「当日の活動」、「事後の活動」についての指導のポイントや実践例を、写真や動画とともにまとめている。また、アンケート調査で得られた回答を元に、Q&Aコーナーを設け、学級活動の実践についての悩みなどに答えている。

【引用・参考文献】

- 1) 鹿取博貴(2019)

『思いやりをもって関わり合い、互いに高め合える学級集団づくり—生徒指導の三つの視点を生かして、学級活動を核とした人間関係づくりの取組を通して—』滋賀県総合教育センター
- 2) 加納一好(2003)

『望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成～評価の工夫と活用を通して～』東京都教職員研修センター
- 3) 文部科学省(2018)

『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社
 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』東洋館出版社
- 4) 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2021)

『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる 特別活動 小学校編』文溪堂

指導講師	小川 宏	〔学校教育課 「特別活動」教育推進員〕	
研究協力員	上田 千裕	〔河西小学校〕	熊谷 龍
	松岡 柊人	〔物部小学校〕	
教育研究所	脇阪 久徳	小井 直子	
担当所員	折木 公美		